

鄭順粉著『枕草子 表現の方法』

中 島 和歌子

本書は、早稲田大学大学院文学研究科で学ばれ、二〇〇〇年に博士号を取得されて、現在は韓国の培材大学日本学科の専任講師を務めておられる鄭順粉(チョンスンボン)氏の初の著作である。

目次は次の通り(節名は省く)。一九九四年から二〇〇〇年にかけて精力的に発表された十一本の論文と、書き下ろしの序章・第五章・終章から成り、他に凡例、論文の初出一覧、後書きがある。

序 章 枕草子の研究史及び本論文の目的と方向

第一章 和歌文学からの逸脱方法(第一節、第四節)

第二章 枕草子の和歌の方法(第一節、第四節)

第三章 枕草子の漢詩文の引用方法(第一節、第二節)

第四章 枕草子の自然の表現方法

第五章 枕草子の精神構造

終 章 まとめ及び今後の研究方向

序章に、「本研究は、枕草子の表現の内部的な論理を探ろうとする最近の表現論的研究を受け継ぎながら、枕草子の世界を織りなしている様々な方法をより積極的な意味で捉え、枕草子の表現の固有な世界を明らかにしてみようとするものである」とあり、書名にも立場と内容が端的に示されている。実際に本書は、その

言葉通りの意欲的な表現論的研究の集成であるのだが、特に詩歌に関わる第二・三章が、緻密で新見に満ちた鄭氏ならではのご研究ではないかと感じられた。以下、やや詳しく述べておきたい。

第二章の第一節では、「角川文庫」八六段の実方の贈歌「あしひきの山井の水はこはれるをいかなる紐の解くるなるらむ」を、「小忌の君達」の存在や「紐解く」の歌語としての伝統、「こはれる」に存続の意味があることを踏まえて、貴女は私には今も冷たいのに他の男には心を許したのか、と咎めた歌だと解釈し直す。清少納言の返歌「うは水あはに結べる紐なればかざす日かげにゆるぶばかりを」についても、贈歌の好色性を一蹴した非恋歌と見る通説とは異なり、上句は互いに結び合った下紐の不安定さ、つまり相手の愛情の薄さを非難するもの、下句は「日かげ」を「解環」と同様に「小忌の君達」と取り、諸注が区別しない「解く」と「ゆるぶ」の違いに注目して、「解けたものではありません。ちょっと弛んだだけです」と自らの潔白を主張するものと解釈した上で大胆な恋の歌と結論づけ、本来私的なはずの恋歌の贈答形式を用いているがゆえに「場」の緊張感が高まったとする。第四節では、三一段の「もとてもかかる蓮の露をおきて憂き世にまたは帰るものかは」が、「全集」のみが指摘する「あなたが私を求めても」の意、歌語「憂き世」「ものかは」の用例、日記文学における下山の勧めに対する拒否のパターンとの共通性から、「仏道への帰依を口実に帰りの催促に反発を見せる女歌の性格を強く持ち合わせ」ていることを明らかにし、それが歌に続く「まことに、いと尊く…」によって初めて「仏の世界への帰依を

あらわす、釈教歌的な性格の方に傾く」のであり、本段は、同じ聴聞でも「罪得がたのこと」を描いた前後の章段とは異なり、それらを「中和させ緩和するものとして存在している」という。

遡って第二節では、七八段の斉信からの「蘭省花時錦帳下」が「中宮のそばで華やいでいる清少納言」を指す根拠として、当時の白詩句受容が「現実の状況を出来るだけ誇張して表現するため、ある種遊戯性の強いもの」であることや、聯句を作る際に対句で「お互いのことを言い合う」型があることを挙げる。斉信に自らを「廬山雨夜草庵中」とする意図があつたことを確認した上で、清少納言の「草の庵を誰か尋ねむ」という返しが、短連歌形式ゆえに「先に出された斉信の句における内容をそのまま斉信側に投げ返し、都の錦帳の下にいる人を斉信に、草庵にいる孤独な存在を清少納言自身にする、いわば立場を逆転させるもの」であつたこと、「訪ねてくれない相手を恨んでみせる、という和歌伝統のモチーフ」も踏まえることを指摘するのである。そして、「草の庵」が卑下の意味も持つ歌語であるのに対し、「花の都」は都、「玉の台」は豪華な家の意のみで、最初の白詩句を踏まえつつ「宮廷を舞台とした当日の現実の世界」に合う言葉が存在しないために、斉信は上句が付けられなかったという。「玉の台」が「玉台」の訓読であることからすると、これが清少納言の予測した答えのようにも思われるが、いずれにしても、次節にも見られるように詩歌の形式や言葉の相違点に関する鄭氏の指摘は鋭い。

第三節では、一〇二段の公任からの下句「すこし春あるここちこそすれ」について、元の白詩句「少有春」が否定的な意味に傾

いたものとする先行論を承け、「心地こそすれ」が「春立ちて朝の原の雪見ればまだふる年の心地こそすれ」（拾遺集 春・七）のように「現実的な状況に反する仮想的な気持ち」をあらわす慣用句であり、当句も「その背後には、現実的には春の気配が沢山あるはずだ」という意味合いが含まれている」からこそ、白詩とは異なる「例年なら春たけなわである時期における、異例の寒さ」を表すことができたのだという。清少納言の上句「空寒み花にまがへて散る雪に」のほうは、「三時雲冷多飛雪／二月山寒」を踏まえて要求された「春色が殆ど無い」と感じさせる景を詠んだだけではなく、「花にまがへて」を付け加えることで当日が落花の季節の二月末であることも表し、通念的・和歌的季節観を利用すると同時に、「和歌史全体を通して異例」な「二月の寒さ」をテーマとしているという。氏が「和歌」と言われる際、多くは勅撰集のみが対象とされているので、その多様性も視野に入れられるべきかと思われるが（例えば「宇津保物語」菊の宴・五〇六、白詩句によるテーマの拡大という指摘自体はもっともである）。

第三章は会話における白詩句利用の分析で、第一節では、九〇段の清少納言の言葉「なかば隠したりけむは、えかくはあらざりけむかし。あれは、ただ人にこそはありけめ」が、「琵琶行」の「猶抱琵琶半遮面」の女の美しさは、「ただびと」ゆえに「紅の御衣ども」の袖を「いと黒うつややかなる琵琶」にかけ「御額のほどのいみじう白う」という定子の姿には及ばないとの意であり、原文の「年長色衰」「漂淪憔悴」した「買人婦」との間に「へずれ」があることを指摘する。この美女のイメージは、「琵琶

琵琶」のモチーフである『白氏文集』卷十「夜聞歌者」の「有婦
顏如雪」「娉婷十七八」に基づき、更に『和漢朗詠集』や『本朝
麗藻』における「妓女」つまり内教坊の妓女や五節の舞姫のイ
メージを適用したものであることが、管絃や「紅袖」などの共通
点と、あえて臣下を表す「ただびと」の語を用いたことからわか
るという。そして、従来句単位の引用が敬遠されていた「琵琶
行」を「枕草子」が初めて引用することができたのは、他の二段
も含め、「その漢詩文を如何に『場』に合わせるか」、「この「改
変」という機知の働きのあったからだと述べている。なお、「琵琶
行」前半には「長安倡女」「名属教坊第一部」「紅綃」などの語
句もあるので、若い頃のイメージを重ねたとも言えようか。

第二節は二八四段について、他の作品における「簾」の記述を
参照し、「女性が内部からの必要によって意図的に簾を巻き上げ
ることは、仮名文学においてほとんど例を見ない非常に特異なこ
と」であり、「簾を巻き上げて雪景色を眺める場面は、簾を巻き
上げて外の風景を觀賞するという、当時の漢詩文学の伝統と、雪
を見る、という白詩句の世界が相俟った所に形成された、当時と
してはかなり斬新な世界」であったことが指摘されている。

以上、「枕草子」の「表現の方法」を説明していく鄭氏の「綿
密な考察」(序章)の一部を見てきたが、繊細で的確な読みには感
嘆せざるをえない。むしろ言葉の壁があるからこそ、表現者の微
妙な工夫を看過せずに済むのであろうかと思ってしまう…。

ただ、氏の言葉に対する感覚が鋭く、読みが丁寧であるだけ
に、早稲田の秀れた先輩方を含む先行研究の紹介(特に序章)や

本文の引用などにおいて、誤植等のケアレスミスが散見すること
が惜しまれる。まさに「玉に瑕」である。また引用本文も、凡例
に角川文庫「新版 枕草子」を用いたとあるが、実際には能因本
や三卷本二類が採られた箇所ほとんどが三卷本(二類)に戻さ
れている。「く」(すべて「く」の誤植)の使用からも「新大系」
「解環」などが参照されたとわかるのだが、断り書きが無い。な
ぜ最初から他の注釈書に拠られなかったのかなど、疑問が残った。
但しこれらはいずれも論の展開そのものには影響が無く、本
書の中身の価値を減ずるものではないことは勿論である。

なお氏は他に、類聚的章段(第一章、分類は「全講枕草子」を踏襲
されている)、随想的章段における景と心との関係(第四章、「自
己」と「外部世界」との関係から見た日記的章段と日記文学との
違い(第五章)も論じ、随所で「源氏物語」との比較も行うなど、
「枕草子」を微視的かつ巨視的に分析されている。部分的には疑
問もあり、詳述・強調すべき箇所が原則的・常識的なことの確認
よりも簡略な場合があるものの、概ね首肯できる論である。

さて、氏は終章の「今後の研究方向」において、物語文学との
関係の解明、類聚的章段の考察の深化、日韓の比較を含む漢詩文
受容法の考察の発展、韓国における「枕草子」研究の活性化への
努力を挙げられている。「枕草子」の韓国語訳も予定されている
ようであり、その翻訳作業の中から、鄭氏ならではの精緻な読み
に基づいた研究成果が更に生み出されていくことと拝察する。大
いに期待せずにいられないのは、本書の読者全員であろう。